

增補雅言集臨見

四十二

813.6

I619g

Wxj

Kodak Gray Scale

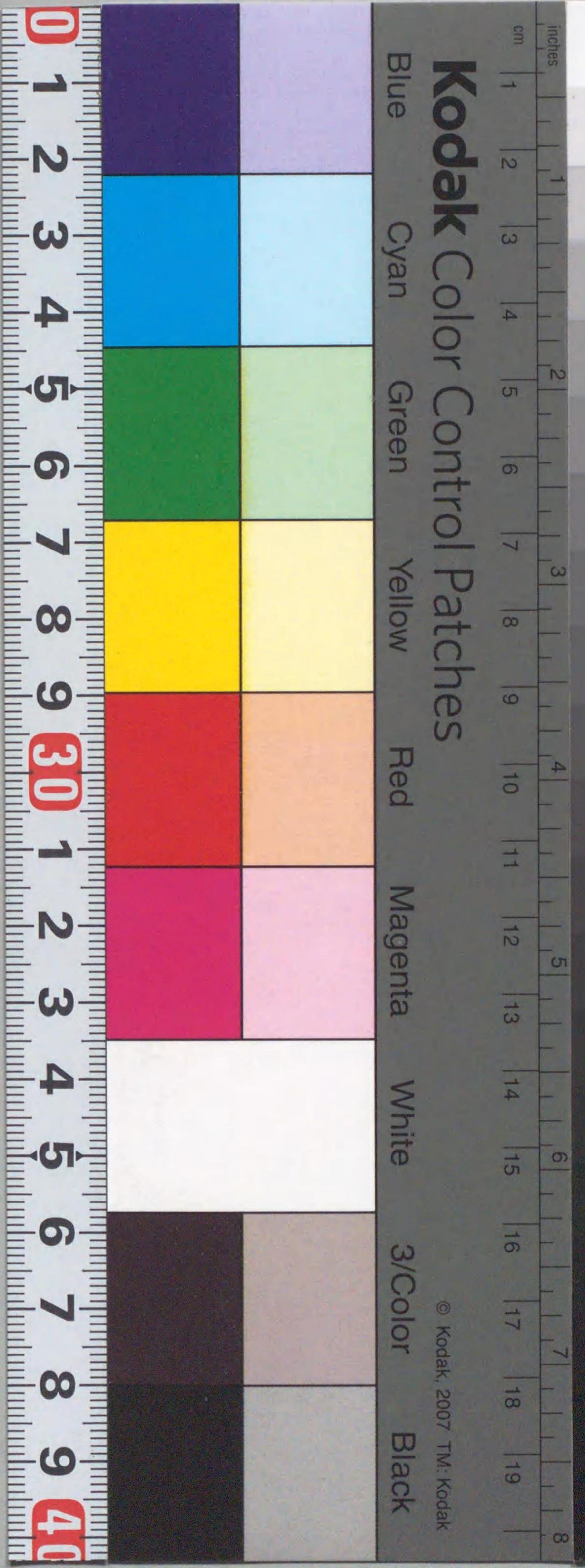
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



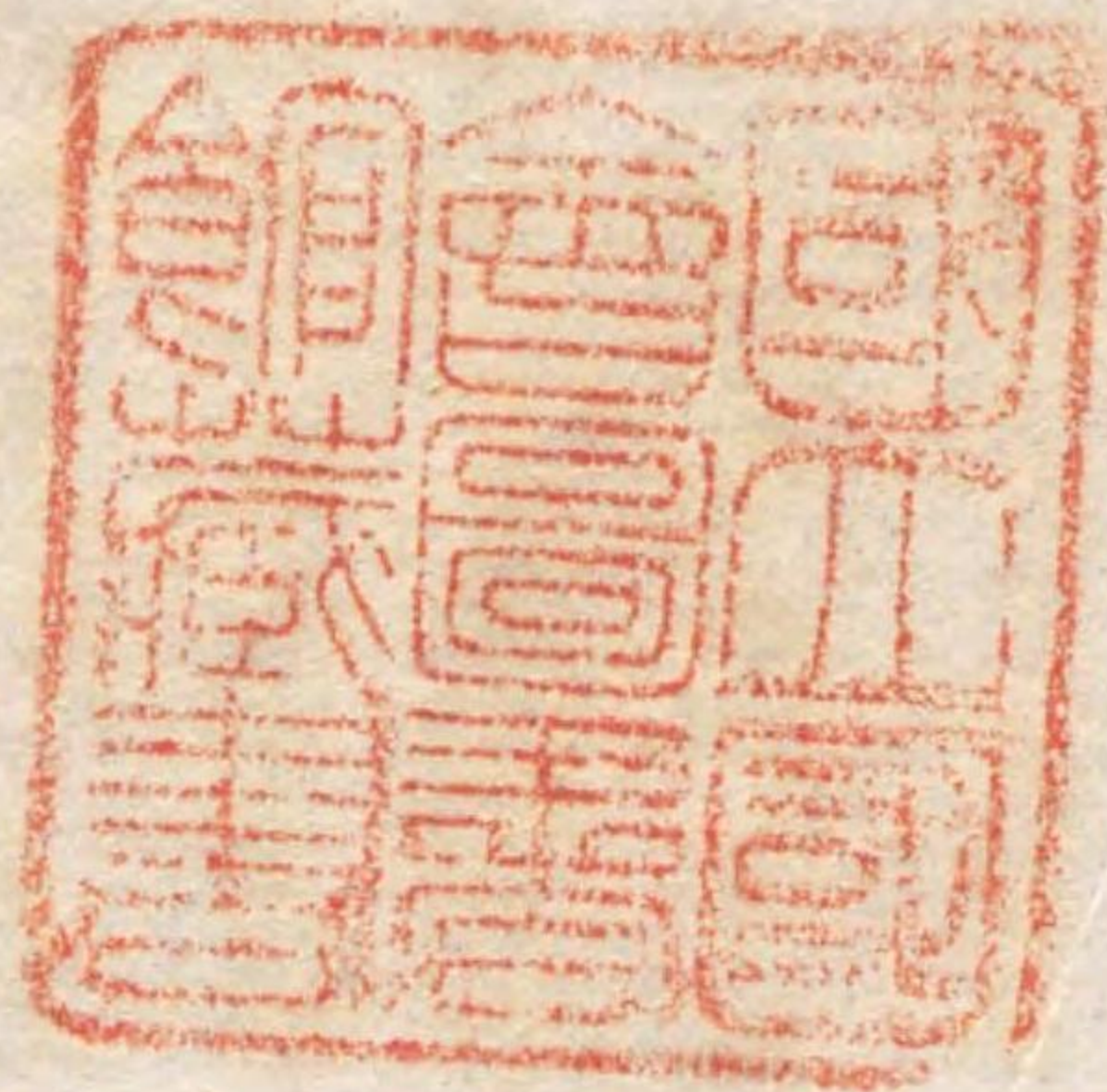
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



813.6
I 619g
NND



691358

増補雅言集覽卷之四十二

石川雅望集

中島廣足補

○江の部

え(空穂 藏開)下ノ、詞こよひの事誰もえとがめ給と申神もとがめ給と申(同)下、あ
廿三そび給ふをまゝて男君ごちえこもりおとせで式部卿宮も右のおとゞも出おとて
(同 祭の使)十 左のおとゞ平中納言つらねて入給ふを 大將え知り給と申(同)卅。人
詞左の大將殿もかたりの聳へえとり給と申(竹取)下、詞此つさくらめの子安
の貝のあしくささかりてとらせ給ふなり扱へえとらせ給と申(同)下、こゝまおとれ
るかくや姫の重き病を給へばえ出おとしまはまさハナツ本と申せは(源 空蟬)十 わびけ
れとえとたおしりへさで(同 夕顔)六 とかりの事へえ聞侍らぬあときこゆれば(同
桐壺)五 えさらぬめどうの戸をさしこめ(同 帚木)廿 おほかる中よもえかえおもひさ
どむまどかりける(うつろ 吹上)下、四、詞 國王こそおぞしきすまひに給ふらめそれ
どよかくていえおとしまさと(同 國讓)中、四。藤壺の事とけよかくおほさうまで
いえおとせと

増補雅言集覽 卷之四十二

○えぞ(新古) 雜下 頼政 「ちのくれいそでーのぶいえぞーらぬか死つくしてよつづのいーぶと

○えやの(源 帝木) 廿八 八みなりもやにおろし侍りぬるをえやのまかりおりあへざらんときこゆ

○えこそ(源 帝木) 廿七 いまよえこそきつけ侍らね

○えーも(源 夕のほ) 九 人の心をあもせざらんことよてごまのろらりあえーもまぎれ給ふまどきを

○えーもや(源 未摘) 十一 いでやさやうよをりーき方の御りさやとりよいえーもやとつきあけにこそ見え侍き(うつは 藏開) 卅三 いでや君の耳とゞめ給ふをりりいえーもやいなさいふ

○えも(玉葉) 雜一 紫式部 「霜こりりとちたる頃の水ぐきのえもかきやらぬこちのみして(空穂 祭の使) 一 えもりきさてせ(源 桐壺) 十 えものりやらせ(万) 十八 「こふといふいえも名づけたりいふまべのたづきもか死いあがみかりけり

○えもいそで(順集) 廿四 「えもいそで戀のまどる、心哉いつとやいそよおふる松枝

○え得(伊勢物) 百七 段 男ふとおこせたりえて後のことなりけり(後) 戀一 えがたかるべき

女をおもひりけてつりそしける(万) 十一 「わきいもややまこえとりみか人のえ

がてはそとふ安みこえたり(更級日記) 下 物かどりどもひとふくろとり入てえてりへるこちのうれしきぞいみどきや(源 帝木) 十 折々こよえねんとえせくやー死

こともおほりめるよ(大和物) 一の宮をえ奉り給ふて(源 帝木) 四十 かのありー中納言の子いえさせてんや(同 紅葉賀) 二 この世よ名をえたる舞の師のをのおども、

○補(万) 二十 「あーびきの山行ーり山人のこれよえーめー山づとぞこれ

○補(堤中納言集) 貫之 筆本 三月ーもの十日京をくの藤れまかのえーとべりけるととき云々

○補(枝 續古) 秋上 俊成 「露ーたき花のえこよやどりけりのそらや月のすまらるらん(同) 春上 西園寺入 道前 太政大臣 「うちきらーたまらぬ雪の花れ枝ようつりよけりな鶯のこゑ

(寛平歌合) 「ふゆくれれば梅よ雪こそふりか、まいづれのえせり花とををらん(源 早蕨) 四 「みる人よかこよせける花の枝を心してこそ折べかりはま

○えい(詠 源 紅葉賀) 初 詠かどし給ふるは是や佛の御かまうびんがの聲あらんと聞ゆ(同) 二 云々 詠もて、袖打をり給へるよ

○えい(源 藤袴) 三 宰相の中將おあど色の今をこしこまやりある直衣すがよてえ

えよ縁(奥儀抄)中えよとの縁といふ也かよとよまかほにせぬさるもトのあまの

よどかくかり(後)戀五、さたま「ぬりそどりそめけん松のえよーあらばうまき袖よ

もかとのよせてん(後)戀四、讀「水鳥此をりあきあとよどーをへてかよふさりのえ

よこそありけき(六帖)三「君が名もよがおもをーのいつがひおあトえよこそをま

まほーれ(同)三「湊いりの波さよがーとあーまよふえよこそ人をおもふべらな

れ(同)上五「かち人のよたれどぬれぬえよーあきは又あふ坂の關のこえかん(伊勢

物)九、十「秋りけていひーかがらもあらなくよ木の葉降くえよこそありけき(源

夕顔)廿「夕露にひもとく花の玉銚の便りよみえーえよこそ有けれ(蜻蛉日記)下、云

橘を参らせ給へりければ「かさりりもとひやーつる郭公花たちをあのえよこそ

ありければ「たちをあのゆりものからぬ身をーまづえなくていとせぬとぞ

れく(源)みとつくし)廿「みをづくーこふるあるーよこ、迄もめぐりあひけるえよ

いふかー(新續古)戀五、俊成「うらみても猶たのむりか身をづくー深きえよあるあ

るーとおもへ(同)出羽辨「えよふりきいづと此水の有あがらむをさぬ夏のいり

で過らん(頼基集)「江よふりくどーふる松の水底の影よさへこそいらい見えけれ

(續古)雜中、伊衡「江よふりく年のへよける松かれどり、るよゆきのけふやみるらん

えよ俗よえよしといひて縁のこと、するの誤也えよーあれ(更級日記)さだよ上

總介よてくざられーえよーあきはかみつふさよゆく(新續古)神祇、國道「世々りけて

ふかくぞ頼む住の江れえよーありける神よつりへて

補えやう(著聞)七、經家水干の袖く、りて袴のをばたかくもさきてえやうーり

けして(同)廿六、えやうーを引入て(源)柏木)廿、えやうーをりおーいきてすこー

おきあがらんと給へどいとくるーけあり

えりくづ(うつ)樓の上)十九、身よあまりさることーたらん人ぞさのあらんえりく

づの人のかどて笑ふ云々(同)下、六、わきらぐのーづく、と思ふこの不いもかなは

で皆その折のえりくづとぞあらんかどの給ふ(同)菊の宴)上、三、大將のおとゞ詞子、ドモ

つたかきが中よえりくづとぞあらんかどの給ふ(同)國讓)中、七、こ、よみうつる人のえりく

づよこそ侍らめそれも人よりのよろーりめるを(多武峯少將物語)たちをきたる姿

も見給へんとあらばえりくづよてもさふらんとて出給ひぬ

える(り)源すま)四、御供よたひ聞ゆるりぎり、またえりいで給へり(同)名合)九

それく、とえりど、のへさせ給ふ云々こたみのとてまつらトとえりとゞめ給ふ云々

えり給ふついでよ(同)桐つは)卅、御方々の人々世の中よおーかべたらぬとえりと

どのへをとりてさふらませ給ふ(同 帚木)七中の品けけうのあらぬえり出べきま
ろりひかり(同)九心よりあふやうもやとえりそめつる人のさざまりがたきあるべ
し(同 柳)九さらぬ上達部もやんごどかくおぞえあるをえらせ給へり(同 濤標)十よ
しあるせりやうかさをえりて(同 かつね)初すぐれさるを姫君の御りさよとえらせ
給ひて

○えりとゞむ(源 寄生)五十かたをらいとさ笛の事をこそえりとゞむれ

補えがち(枕)六一なんてうことあき人のせむろよえがちよ物いさういひさる○注心
えがちよ物いふかるべし

えごち役(神武紀)十是役也エタ天皇志存必克

えごをり枝折(新六)(夫)七信實「ふるさとの花橘の枝をりよかさみおぞゆるひとむ
りしのか

えごをからさざ(千載)賀崇徳院「吹風も木々のえごをばならさねど山久しき聲ぞ
さこゆる(榮 月の宴)二かく御門の御心のめでたけきば吹風も枝をからさざかどあ

きばよや春の花もよほひのとけく秋のもみちも枝よとゞまりいと心のどりある御
ありさまなり**補**(新勅)春上内大臣「打とへて世の春ならし吹風もえごをからさぬ青柳

のいと(續古)賀花山院「吹風のえごもからさぬ此ころの花もいづりよふあるべ
し(新續古)賀爲邦「八千代へん君よ相生の花の枝の風もからさぬ九重の春(同)同長

「春風の枝もあらさざむづりよてかびくさりの青柳の村(玉葉)同出羽辨「風ふけど
枝もからさぬ君が代よ花のとれとぞとめていげか

えごこかれせぬ木(六帖)五「君もあれも生れりへで今たよも枝わりれせぬ木と
もかりかん

えごおどり(うつろ 祭の使)一。中將父君ニ向ヒテ祭ノ使ニ出タツ時「もとみれを高さかつらもけふ
よりやえごおどりとと人のいふらん

えごく(榮 あさみどり)八をべて此との御えたくよつゆかゝり給とぬ人かく
かりとて給ひぬ

えござし(源 東や)五十兵部卿の宮の萩の云々いりでさるさねありけんおかト枝ざ
しあどのいとえんあるこそ

補えごさるかせ(山家)上「山櫻枝さる風のかこりあく花をさながら我物よさる

えたもせ(夫)九俊頼「山がつがせどのたかゞき枝もせよゆふがはなれりせがひく

よ

補 えぞ 蝦夷(顯輔集)「あさましや千島比えぞのつくるあるとどき矢こそひまの
もるかれ

補 えぞがいとや(壬二)下「おくのうとやえぞがいとやの烟たよおもへばあびく風
ひふくらん

えな(神代紀)上 以淡路州為胞エナ

えからせ(拾)戀四よみ「あしねとふうきうへおそつれあけれ下へえあらせ思ふ
心人を(源 東屋)四 さうぞくありさまのえあらせとのへつ(同 帚木)冊 五月のせち

よいそぎ參るあし何のあやめも思ひづめられぬよえならぬねをひさかけ(同

若紫冊「いそけあきたづのひと聲さしよりありまよあづむ舟ぞえからぬ(玉小

櫛) えならぬの淺からせにておもひをやむ事の淺からざるよ也えよ江をもたせ

とり(源 あうし)十 御志つらひおどえからせしてままひけるさまあせけよ都のやん

とをかたどころとよことからせ(同 少女)冊 さらのちもづりへのれうまでえから

て奉られ給へり補(源 紅葉賀)五 菊のいろくうつろひえからぬせかさして(保憲

女集)「させりれちがらとふせる秋萩の露のえからぬものよぞありとる

えらび(源 少女)冊 とゞもてなすがらよよりてぞえらびよいりける(同 みをつく)

えらび(源 少女)冊 とゞもてなすがらよよりてぞえらびよいりける(同 みをつく)

二 廿 さうぞくをとへのちちをえらびたり(古)序かくこのたびあつめえらされて

の(源 帚木)九 我物とうちたのむべきをえらさん(同)十 君たちの上あき御えらび

よの(同)五 そのりたどとりいでんえらびよ必せもるまどきいとかたしや(同)十

せとがきよえらされて

えん縁。居宅(大和物)六 男えんよのりりてぬ 男詞かとり物の給とぬ雨のこりか

う侍りつればやむまでのかくてかんといへ(枕)四。常陸介 縁のもとよあやし

き者の聲よて(同)四 三 きぬ二のひとらせて縁よ投出るを一つととりよよりて(同)

廿五 ひるつりた縁よ人々出るあせりたるよ常陸介いで来り(同)四 七 ついちのちど

よひさしさしてゐたるを縁のもとよちのくよびよせて(更科日記)下山のかよより

人あまさくるおとほおどろきてみやりたれば鹿のえんのもとまできてうちあいた

るちかうてのかつかいからぬ物のこゑあり(同)同 夜中をりりえんよいでゐて

○せせり縁(枕)六 せせきえんよ所せきひの御さうぞくの下がさねをどひさちらさ

れたり

○ちそき縁(同)六 わたどののちそきえんかればこなこのえんよちとねさし出たり

えん縁。ユカリ(源 寄生)冊 あかがちよ世をそむき給へる宮の御方よえんを尋ねつ

つ参り集りてさふらふもあされある事などくよつけつゝお祈りるべし(枕)四、いとほしけあき物、遠きありきせる人のつきく縁さづねて文えんといえれば(久安六年季通)「いそし水えんと結ふ人皆のうるほひをえぬ物のあきかか

○えんよふれて(宇治拾)三八、ふくたびのやれをどの云々其やれのをしをつゆむりりかどおのづからえんよふれてえたる人の守りよけり(源手習)三何りのもつせの観音の給へる人ありとの給へ何りそれ縁よまがひてこそちびき給えめ

えん(宴)拾、秋延喜の御時八月十五日夜藏人所のをのこども月の宴よとべりける(源寄生)九十、さていえんや何やとめてさわがるゝ事のかといみとうそつおやき申給けき(同)帝木三、九日の宴よまづりさき詩の心を思ひめぐら(同)花の宴

初きさらの廿日あまり南殿の櫻のえんせさせ給ふ(同)淨舟十、御前のつげせんざいのえんもとまりぬらんり(同)横ふえ廿、りの宮れをぎのえんせられける日(同)鈴虫十、こよひの月のえんあるべかりつるをどまりてさうとかりつるよ(同)十一、こよひのまぐ虫のえんよてありてんとお祈りの給ふ

えんよん(延引)宇治拾)十二、さしたる障もあきよ延引せしめ給ことありるべからせと傍をることかぎりなし云々今日の受戒の延引あり

えん(艶)源)帝木)廿、えんよこのまき事いめまつりぬ所あるよ(同)あらし)十、えんよ

まむゆきさまのまきりさまよぞとゆる(枕)三、いとえんあるりへりごとく、んといひあせ(同)九、青児うをやうとえんある硯のふたよき

えんぐり(源)梅)あえ)七、何でとも物このみえんがりおせれる

えんごち(源)夕)あは)九、えんごちけしきまん人のきえもいりぬべきすまひのさまかり(同)若紫)一、四十、りのうつりがれいとらえんよしかへり給へれ(同)やとり)六、ことさらよえんごち色めきてもてか給せねど

えんどう(筵道)榮)駒)くら)へ)三、御車陣よてりおろしてえんたうまゐりておりさせ給ふ(枕)六、未の時計よえんどうまゐるといふふどもなくうちをよめき帝)いらせ給

へバ(江次第)一、四方拜事云々天祿四年記云自中階下至御屏風西頭敷筵道上南第三間爲御出路鈔布單固可敷之○筵ヲ敷花道ヲ云フ也(枕)一、びらうげの車など門ちひさければさとりてえ入らねば例の筵道よきておるよ

えんかる(源)帝木)廿、えんかる哥もよまぎけしきをめるせうをこもせでいとひとやでもりよ情かりりう(うつ)藏)開)上)四、いづくよりぞやいとえんかるふとりか

(源)帝木)十、えんにもものもちてうらみいふべきことをもとらぬさまにのびて

えうと 要事(宇治拾)十四ノ加持する死人忽ニ蘇生して要事といひて後又目とちてけりとり(北山抄)四 功課之定朝之要事也

えやみ 瘧病(和名)三瘧病俗云衣夜美一(宇治拾)十八其年此村ノ在家ことトくえやをいして死ぬるものおろりけり此魚の主ハわが家只一字其事をまぬる

えふの身なれむ(古)十九降雪のけかひけぬべくおもへともえふの身あまバ猶やまぢ思ひハふり。此詞諸説さまざまあれど慥なりとも覺えず閻浮の身と

えこ 依怙(平家物)五ノ廳のちもべのからひかやうのことト付てこそおのづりらえこも候へ

えさらぬ(發心集)五父ノ但馬守ニテ下リケレバエサラヌヲニテ遙ニ往ナリ(源夢の浮橋)十えさらぬこともかぢのそひつゝをせと(三部抄)えさらぬとて

えさげ(土佐日記)下たよりてはものもさえせさせたり

えさろのせむ(驛路)公式令三親王及一位驛鈴十刻云々六位以上驛鈴八刻四位驛鈴六刻五位驛鈴二刻云々初位以下驛鈴二刻云々其六位以下隨事増減不必限數

えび 海老(新續古)講人のえびをこひよおこせさるゝありけるまゝ十九やると

大中臣 一世の人ハ海のおきかといふめれどまどまたちよもたらせざありける能宣朝臣 香

えひ(源末摘)六えひのりいとかつりうかぢりいでて(和名)十衰衣香文字集略云衰衣香俗云衣比(新猿樂記)飾具人條唐物沈香麝香衣比丁子甘松薰陸青木龍腦牛頭雞舌白檀云々かくあれバ香の名なり

えびかづら 按和名抄、紫葛、衣比加豆良、蒲萄、衣比加豆良乃美(記傳)或云此物鬚ありて蝦蟇に似たる蔓草なる故ト然名くと云り

えびぞめ 徹書記物語云えびぞめの下がさねハえつるのいろしたるものかり蒲萄のうとる色の紫黒色なるもの也此色をえびぞめといふ蒲萄と書てえびかづらとよむあり

えびら(散木)「山里ハこやのえびらよもる月の影よりまゆの筋ハみえり(顯昭)注よえびらハ蠶をいるもの也こやハこがひる屋也(散木)伊勢國ニ侍ける比

むつきのまつねの日ねいとひて家をいで、野よいきてひねもれるくらしてかやをくりてこがひるどりよえびらといふなる物トすあるを云々

えびら(職人盡歌合)箴細さかづらかなくて柳えびらトす 歌よもさるづらとよめり

えびす(伊勢物)十五 女かぎりなくめでさしとおもへどさるさか泥えびす心をと

ていひのいせん補(月清)「こがおもふ人よままばちのくのえびすの里も
うときものりひ

補えびすげけ(新千)誹六帖題よてよと侍りける歌の中家「こがこどくおくれこ
ほりのえびすがけとよもかくよも引ちがへつゝ

えもいとせ(うつは 祭の使)一舍人三十人えもいとせをうぞがせて(源あらし)十え

もいとぬ入江の水などゑまかくの心のいたりをくかからんと云々

えせいたどき(枕)十ノえせ板どきのはゝき

えせがさち(枕)十二見ぐるゝき物、夏ひるねいておれたるいとよき人こそ今少

をりしけれえせがさちのつやめ死ねられてようせいのるうゆがともつべりた

みよとらとららん不どのいけるりひかさよ

えせのたうと(義経記)五 忠信たゞ一人になりてかりくゝえせかさうとありつるひ

足よまみれてわろりつるよ

えせ連歌(建武間古記)二條河原落書このころ都よとやる物云々京かまくらをこ死

ませて一座そろいぬえせ連歌在々所々の哥連歌點者よならぬ人ぞかさ補(枕)

えせ牛(宇治拾)十、えせうゝならまゝりバ引れて荷も牛もそこかひれまゝ補(枕)

六ノきたあひある車よえせ牛のけてゆるがゆくもの

えせ親(枕)十二右衛門のせうなるものゝえせおやをもとりて

えせ車(枕)九ノおひのけられさるえせ車とも牛りけて所ある方よゆるがゆて行

かどいとわびしけあり

えせ小鷹(建武間古記)尾羽打ゆがむえせ小鷹てこよとれもすうれとも鳥とる

事いさらにかゝ

えせさいそひ(枕)一ノおひさ死なくまめやりよえせさいそひかど見てるたらん

人いおせくあかづらもしくおもひやられて

えせ受領(源あふひ)九 何ともといれ給ふまど死えせせりやうの娘かどさへ云々

えせもの(枕)一ノむりゝいえせものも皆をきをりうこそありけれ此おろかやう

ある事や聞ゆるなど云々口々いひ出かどしたるほどの(同)八、えせものゝ所うる

をりの事補(同)七、えせものゝ家のうゝ

○天の部

て(手)神代紀上手足之爪

て(手)枕三よけあき物、あゝきてを赤き紙よかきたる(源常木)十てをかきたる

よもふかきこといなくてはこゝろこのてんかまはしりかきをこそりとかく云々
(伊勢集) 二故式部卿の宮の御てよてかれたまへるものをとて「かた人のかたど
めけんみづぐさのうちみるよりぞあられをめける空穂(國讓)中藤づのさむそ
のかきてよてまつられたる本をこそいをとこでも女でもならひ給ふめれ

○てのすぢ 筋手の。書(源梅枝)十卷こと御手の筋をへつゝいみどるかたつくさ
せ給へる云々

て 樂曲(源わのち)下ノちらべことある手二つ三つ(同あのし)六くわうをよるとい
ふ手があるかぎりひきすまゝ給へる(同未摘)五あまをりりふりきてならねど物
の音からの筋ことあるものかれなきよくもおせされき

て 尾花(源寄生)七十を花のものよりことよてをさし出てまねくがをりうとゆる
業(源帯木)廿一立田姫といむんまもつきあからせさかたの手にもおとるまど

て 俗ノ心(源帯木)三おろとなぶらちりくて文どもあと見給ふついで(枕)七
猫の上の限くろくてこと皆白からん(同)廿六うす色のうらいとくくて上(云々)

て 源東屋(卅)さいふをどがわりくての比(同浮舟)四十ものかたりあと聞え給ひて

のついで(古)哀傷藤原のさつねの朝臣の身まわりての又のと(比)夏云々
でなてか の部

でい 泥(うつほ)國讓上一かきつけさる歌いこがねの泥してあり(續後紀)三
金銀薄泥用之公私有費无益宜禁斷云々(空穂 嵯峨院)四十御さうぞくども白きあ

をこたいれて白がねの泥して畫がきさり(榮初花)五十此をこのうち泥よてあ
でをかきたるありかへかるべ(盛衰)卅九四半の小双紙金泥書たる小字

の法華經落窪三紺の紙よこがねのいでいてかきて

○でいのことゑ(空穂)藏開上一あくて皆人でいのことゑひて足をさりさまよた
ふれよろずひつゝ

てい わう 帝王(源桐つほ)廿帝王のりまなき位(同あらし)五ていわうのふりき宮よ
やいなそれ給ひて(同)九帝王のかぎりなくあきものよ給ひ

てい ねい 丁寧(白文)廿七 不勞人勸醉鶯語漸丁寧

てい け 天氣(土佐日記)下云々ていけの事よつとていのる
○てけ(土佐日記)てけの事かちどりの心よまりせつ

てい トのゑん(古)春亭子院哥合の時云々宇多天皇おりるさせ給ひて朱雀院におと

一まゝ又此院を造らせ給ひておそゝまゝなる所也仁和三年十一月十七日御讓位昌泰二年十月十四日出家承平元年七月十九日崩號亭子院皇年代

てむこ一よろひ(紫日記)下てむこ一よろひよさきものいれて(玉葉)賀千載集奏覽の時いれて侍りける手箱あゝてよまきたりける哥俊成哥云々

てをかれて(空穂 梅の花笠)十と一五つよめ親の手まりりてをれてよの中侍り一よ

○てをさる(伊勢集)六帖(五)後(別離)旅よまりりける人よ扇つりてとて「そへてやる扇の風心あらばわがおもふ人の手をををををを

○てをさつ(更級日記)上これハ男をさもをねべいとてをさちよあらく一けよてとまといふものをひとへうちふきされ(万)十一「たらちねの母が手をををを

くむりすべをきこといしまごせかく(源)うす雲(三)てををさちてうろめたからん事つれもをさむりさかくていゝありくらはべりらん

ていゆる一給もんや(枕)八(十六)てむん侍りやまろもうさんと思ふいゝ手いゆる一給もんや頭中將とひと碁かりなおせよさきそといふよ

てよどるむり(源)松風(廿)二「めぐりきててよどるむりさやけさやあそぢのいま

のあんど一ヶ月(惠慶法師集)「ひさりたのでよどるばかり成よけり雲此いるてふ寺よやとりて

てよかくる(源)竹川(廿)八「てよかくるものよもあらば藤の花まつよりまざるいろを

見まゝ(補)忠見集「てよかけでこゝまのをいむ藤の花をらようつればなみぞをりける(万代)春下後三(條内大臣)一人からバひきとめてや恨ましてよものゝらむりへる春

りな
てよ捧けさるごと(源)東屋九手よさゝさるごとおもひあつりひうろと奉るにかゝりてあん

てやん(手本)うつね(國讓)中(二)四十六右大將殿より手本四くさんいろくの志記一よ

りきて(源)若紫(四)三十ことさらをさかくりきか給へるもいとをりてさきばやがて御手本よと人々きこゆ(同)五十今めりし手本からむいとよくり給ひ

てんと見給ふ(補)狭(四)上むせめの手本よとらせまろし侍れど(重之集)御手本のつ

くよくどつりいゝてぞかゝせ給ふりの御手本りきよくなされさるよ
(補)てへ(六帖)「戀てへばをらぬ道よもあらなくよあやしくまどふわがこゝろりか
(大和物)「からよたよ我きたりてへ露の身のさえバともよと契おれてき(伊勢集)

云御うへー天曆「むりーより名高きやどのことのもこのもどよこをおちつめる
御製
てへ(古)人雑下、よみ「いまさらよとふべき人もおもほえぎやへむぐらしてかどさせ
りてへ(拾)人雑賀、よみ「われのみやこもたるてへ高砂のをへよさる松も子も
とり(忠見集)「君てへべいのちをゆづるあーたづの雲の中をやおもひやるらん
てへん(長門平家)八かぶとのころをりさふけよかたふけをこしててへんいさは
な

てとりかそー(土佐日記)上いまのあるトもさ死のもてとりあそして
てとりあーとり(竹取)十からうトていき出給へるよ又りかへの上より手とりあー
とりーてさびおろー奉る

○てをとるく(源わのな)下四手をとるく十覺つりなりらぬもの、師かりりー

補てりうそ(保憲女集)「よーの山花うちをぶくてりうその聲よもゆらぐ朝彦の影

補てぬされ手貫(山家)上「春雨のふるれ、こりを生ぬらぬれくつまんあたみ
ぬきいれ
てぬれき

てる(榮)ゆふして五「日のもとをてらー、君が岩かけのよその煙とあるぞかか
しき(古)秋下「あめふれば笠とり山のもちちさの行かふ人の袖さへぞてる(同)同
忠岑

みひと「秋の月やまべさやりよてらせるの落るももちの敷をよととり(同)賀「岑
しらす
たりき春日の山よいづる日にくもる時かくてらはべらかり(土佐日記)下廿三日日

てりてくもりぬてらはカナてらん出ス

てるつき(照月)拾員上「ふく風もおくーら露もてる月の光にまぐくかすがの、そ
花(後)冬よみ人「ぬを玉のよるのみふれる白雪のてる月のけのつもるかりけり

てををりて(源)としひめ廿手をりてかぞへ侍ればかくおとさくあらせたまひ
にける御よまひのそども夢のやうにかん(枕)二をさまき物、らい年の國々を手と

折てかぞへかどして(源)帯木十「手を折てあひとーことをかぞふればこれひとつ
やんれみぐうきふ(伊勢物)十六「手をりてあひ見ーことをりぞふれば十とい
ひつ、よつひへよけり

てををーして(うつ)下國讓人のきりまをーく給ふもの、音を手とをーみてけ
ふーもあなば何のりひりひ

てをわりち(落窪)二こ、りーて手をこりちてもとめ給ふ(竹取)上た、一所深死山

へ入給ひぬ宮つらささふらふ人々皆手をこりちてもとめ奉れども御まわりもやー
給ひんえみつけ奉らむかりぬ

てをこりる(源 帚木)十一「うねふゝを心ひとつよかぞへきてこや君が手をわゐるべきをり

○てをありちて(大和物)四かは此男たづねてゐてこといひければ供の人手をありちてもとめさじたり

てをたゝく(源 夕顔)廿手をさゝまたまへ山びこのことふる聲いとうとまゝ云々

補(紫日記)手をたゝきのゝれどいらへる人もあゝ(空穂 樓の上)四つりどのよて手をたゝけとの給ひおきてゝり(同)とらゝゝあうらんよいたりてさゝけバ大將おまゝり

てをつくりて(源 あふひ)九手をつくりひたひよあてつゝ見奉りあやさるも

てをつくれ(源 紅葉賀)五けふハ又あき手をつくりさる入あやの布と(同 玉葛)四十

よりひじりて手をつくりて奉り給ふ(同 國讓)中十五今上おりの給ひてんとき御前よ

て何事も手をつくりて仕り聞せ奉らんと(蜻蛉日記)中下ものかづけかとするよ手

をつくりてものせめり(狹)十一上おのゝこよひ此ねとも手をつくりてきりせよと

の給もるるを中おのゝ手をつくり給へん中よ

てをねぶり(宇治拾)八ノ云々 此目をいりらして我をどくえんと手をねぶりの軍ともうせよけり

てをうち(落窪)三 中納言殿よものをどよまこびりへゝ人やり給へどさらまい

れたよいれどかといへ北のりた手をうちねたがる(枕)四ノ。雪山こもりが申つ

るひきのふいとくらうあるまで侍さろくを給へらんとおもひつるものを給へらど

かりぬることゝ手をうちて申侍りつるといひさわぐ(うつろ 院)八ノ 後の

腹ごちてのゝり給ひていみじき事を給ひて此盗人ゝゝかんと手うちての給へ

バ御こゝろをやぶらトとてえおまゝまさせ(宇治拾)七ノ。馬ノ死カひかくあま

てぬれバ手をうちあさましがりかきぬをりよおもひされど

てをのまゝめ(榮 つほみ花)十この四月みあれの日よりてをのまどめて來年の四月

いせんよつくりいざさざらんをバ司をとり國をめりへゝなどせさせ給ひ云々

補てをのおと(拾)雜戀く「みやつくるひどれたくみダてをのおとの布とゝゝか

るめどもゝりか

補てをおふ(著聞)十二、むくろよ手をおひさりけるり

てをくみさるやう(うつろ 嵯峨院)一、かくのこど手をくみさるやうよゆきまどをこ

の中よいさゝりおろりからせいのちをかぎりて侍るよ

てをふる(古) 春下よみ「吹風をかきてうらとよ鶯のこれや花に手ごよふれたる

補 (好忠集)「花のと妹わき田手もふれでふるまかからよくらに比りか

てをあがき(うつは 國讓) 中七あさみ御事おせやうよさいらりよてと手をあがき

ていのり願とせさせ給ふ

てをさしいたは(源 末摘) 二十九大かこの御ものつゝとのわりなきよてをえさし出

給とぬとさんと給ふるときこゆれば

てをひたひよあて(榮 見てぬ夢) 廿二位の新發意此思よもこもらでさべき僧と

もしてさまと御いのりども行ひて手を額にあてよよるひるいのり申すあかい

ととといひ思ふほどに 云々 (宇治拾) 十一 清明ガモト道満 法師あらたふとい

ひて手をすりてひさひよあて立とりぬ(土佐日記) 六日をづくしのもどより

いで、難波津よつきて河尻よいるみな人々女おきを額よ手をあてよよろこぶ事ふ

たつかい補 (宇治拾) 六僧のありけるが手をすりてひさひよあてよをがと入さるが

てをむ(落窪) 二北のりた何のあたよとよかくよ恥をみせ給ふらん 云々 かくりよ

死のやうかる人こそありけれかよものからんとて北のりよ手をもと給ふ

てぞする(源 夕霧) 十六あが君とかくおし立てひたふるなる御心なつりせ給ひそと

手をさる(同 紅葉賀) 廿七太刀をひきぬけば女あが君よとむりひて手をさるよ(う

(つは 忠こそ) 十 北の方そくちよ 北のりた手をすりていつよきぬ五十疋とらせて

の給ふ(同 あて宮) 廿二と治部卿腹さちて太刀をぬきて子供おひきてたる所むき

めさめさちをとりにて額を地よつとてあける男六人女四人手をすりてぬよ物いふ

(宇治拾) 九只観音のそちびりせ給ふなめりとおもひて手をすりて念と給ふ

○てをおしすりて(源 行幸) 三殿より申させ給ふ 云々 御とくをもちかうふりよべら

んとてをおしすりてきこえる給へり

てがらみ(組也) (落く) 二いりでい死はさまよいりにしがあとて手がらみをし給

ふ補 (空穂 藤原の君) 四十そちてがらみをしといふよよそのやもめのまよます

所よりやもめ男のすまよひる

てかく(き) 人ノキツトテ手 (源 常夏) 十御ともの人のさ死おふをもてりきせい給て

(同 夕のほ) 十あかかまとして手かくものから(蜻蛉日記) 中 初瀬ま音せでとたる森

のまへをさはがよあかりまよと手をかき面をふり 云々 (狭) 四 扇 一名をよ

いみひとどれめかるあふぎりあてかくむりりの契からぬよ 手書 カ (夫) 二 (堀川)

霧 一とたやもりあるこの綱よてかくかりそれまもえぬ霧の水上(源 柏木)六廿い
仲實 一とたやもりあるこの綱よてかくかりそれまもえぬ霧の水上(源 柏木)六廿い
たまろしき事のおほりるべれれと心ちせんかたかくかりしければ出させ給ひぬと
手かき聞え給ふ(枕)あなりまたまねてかたかどすれと(狹)四上志のびてとらへ
ばあなのまくと手かきたまふ(後拾)講 一雲のよていりであふぎと思ひしよてか
くさくりよ成よけるりか

てかた 手書 (榮 晚待星) 一手かきの大納言卿也のみこ今の權大納言(同 花山)十てか

死のまけまさの兵部卿のおんいもうどの君の腹かりけり(源 梅枝)十世中よてか

くと覺えたる上中下の人々よも(補 重之集)いとかいこ死手書ありとて(空穂 藏開)

中ノ此まゝとこいむり名ざりりけるひめてりきうたよと也

てりめ 手瓶 (平家)九ノ佛し御ありしをまるらせんとて片手よ手瓶といふものよ
油を入てもち片手よ云々

てか (和名)三刑罰具漢語鈔云天加

てがひ 手養 (夫)十七隆信「そみある手がひのをしやこれならんたちあるむれよと」

ぬつがひ(拾玉)一「朝夕よこせゑよとどくむら鳥のてがひよなるよとやまべの
さと

(補)てがひのどら(六帖)二(夫)廿「あさぢふのをの、篠原いりあればてがひのどら
のふいどころあるならん天

(補)てりせ(大納言師氏集)「と死むをぶてりせよいたくほころびて花のいたひもと

けよけるりか(同)「鶯のよる青柳のいとあれば君がてりせよとくるあるらん

てよ(万)廿四「ほとゝぎはこゝまちりくをきかてよす死かんのちよ志るしあら
めやも

てざり 手鷹 (大和物)五御手鷹よ給うけり名をばいそぞとかんつと給へり

(補)てぞまもゆら(續後拾)秋下徳大寺入道前太政大臣「此里よよとれ川風さむければ手玉もゆ

らよ衣うつ也

てよゆ(拾)雜「ちめてこそ千とせの春のきつよとめ松をてどゆく何りひくべき

てどゆ(兼盛集)廿八九月田所よ翁あり「足引の山田のこまけあはまでといおおせと

りぞおふもてどゆ

(補)てぞめ(續後拾)戀一後一條入道前關白太政大臣「志れおればくるし死ものを河内女の手染の糸

比色お出さん

(補)てつち(著聞)十久しく筒をふりて調一をとりかさねさりけりてつち
按此前文ニモ次ニ
參河房すゝみて調

一を打たり
けりトアリ

てづから(榮 つほみ花)一 ささりりうつくしき御ぐしをてづから尼にかし奉り給ふ
 ようき事数忘れ見えたり(狹)三ノ上もち給へりける扇の打おられたるが手習せ
 られたるの手づからの忘れざしやとゆりうて取見給へ(源 末摘)卅さてもあさ
 ましの口つきやまれこそ手づからの御ことのかざりかめれ(空穂 藏開)上、まゐり
 物のかたるまな板をさへ御まへにて手づからといふ計までこれ猶そひまらひて
 参り給ふ(万)五ノわたのそこおきつふりえのうをかみのこふのはらよみてづら
 おり給ひて(宇治拾)九もとめいでたる折いてづからといふ計にしてくひて(源
夕顔)廿かうしてづからあけ給ふ(伊勢物)十三てづからいひりひ取て(夫)七、押小路
 「よく風よわが袖のりやよふらんでづらうゑし軒の橋(同)後京「ゆくをゑし
 わがそでのりやのこるべきてづからうゑしのはれ橋(宇治拾)十五、夫婦手づから
 みづのらしてめさせたり(同)十六此僧まことをいたして手づからみづら書供養
 し奉りて(同)廿八 さとがせ給ひしとよてづらおせさふらふやう
 てづらみ(古事談)御料ノ御オロシヲ被出タリケルヲ藏人所ノ臺盤ノ上ニ置タリ
 ケルヲ清成手ツカミニツカミ喰テ

てづらひ(源 紅葉賀)二 舞のさま手づらひあん家の子のおとなる(同 紅梅)七てづら
 ひすこしあよびさるをち音かんおとよし及び給む(同 末摘)四 きんをぞかつり
 し泥かさらひ人とおもへると聞かれ(云々)おしをべての手づらひよあらととお
 もふとかたらひ給ふ(同 冬どめ)九 十さるいそよき上手のをぐれさる御手づらひ
 ものつくし給へる物よたとへんりたか

てづらひ(結 源 螢)十 中將のけふれつりさの手づらひのついで(花鳥)手結左近の
 眞手結也五月五日よあたれり

補てつとひ(今昔) いそりけし物染そりかさをるよ女もてつたひて四五日よあ
 りよけり

てづ(榮 見とてぬ夢)廿 只もとの内大臣よておせしりばいりよめでさのらま
 何の志をしの攝政あてづ、關白の人わらされかることをいづれのちこりのおぞ
 しあらざらんことわりよいみとうかん(宇治拾)四てづ(袖中抄)十此とふの郡の
 とふあめるこもの義きめて手づ、かり(新猿樂記)十娘者中之糟糠也(云々)織紙裁
 縫甚以手筒也(紫式部日記)いちといふもトをたよかきわさし侍らぬいとてづ、
 まあさましく侍り(云々)宇治拾四入道の君こそかゝる人のをりし物たりあど

もするぞうし人々わらひぬべあらん物がさり給へわらひてめをさまさむといひ
ければ入道おのれの口でづよて人のとらひ給ふをりの物がたりのえしむべら
ト云々○この俗に口不調法と云事也北邊ノ説

てづくり(風俗哥)かひかぬよるまの雪りやいかをさのりひのけ衣やさらにて
づくりやさらにてづくりや(空穂 藤原君)廿六布のふとれを上をよ染てふときてづ
くりを下がさね上の袴よ着て(夫)三卅袖中抄「遠かよ白花こそいかをさの
かひのでかこれさらにてづくり(万)十四ノ七「玉川よさらにてづくりさらよまよ
そこのこれよさかかき(夫)十四般富 門院大輔「玉川やをちの砧よならはかりこやさ
けるてづくりの布拾愚上「てづくりやさらにかねの朝露をつらぬきとめ
ぬ玉川のさと

てつき(源 紅葉賀)十さうの琴の云々ゆいたまふ御てつきいとつくりければ(同
帚木)廿二うちよみそりがさりいひくつまおと手つき口つきとたどくからせ
(同 若紫)十りいたまふてつき筆とりたまへるさまの(同 空せみ)四手つきやせく
としていさう引りくいためり(同 ことふ)廿手つきれつぶくとこえ給へる

てか(宇治拾)十三廿二今日の齋筵にてあがの役あるべからせ(江次第)大饗居餽飽

朱器大饗上懸汁自余有別汁坏或大納言中納言參議弁少納言等手長(雜々記)手長の
役の給仕あり

てなれ(源 手習)五十にびいろにてなれよ事なればこうちぎけさかどたり
てなれのおま手馴後戀二こま「どがやどの一むらすきりりさん君がてなれ
の駒もこぬりか(和泉式部集)上「いそまをされがてなれのこまからば人よる
がふあゆもるなど

てからひ手習源空蟬十九てからひのやうよかきすさ給ふ(同)十かの御てあ
らひとり出さり(同 若紫)五やがてんよもおすよやてからひをささま
よかきつゝ見せ奉り給ふ(同 あふひ)四十御をりなど打ちらしててならひをて給
へるをとりて(同 浮舟)六十をりかくあつめ給へるてからひをやり給ふをめ
りとおもふ

てからい体ノ語源すゝ虫三さて阿彌陀經からのりみのもろくて朝夕の御てあ
らよにもいりよとて(同 夕きり)五十りのてなら給へりらでんの箱かりけり
(中務集)「どをへて音よきつるこのねをてよからつる秋ぞうれよ
補てな著聞十八十八これをもて手あまはとほとほるといひたりけるよ

てな(著聞)廿下藤のさるてかといふ布着物を着てかまをよよさ

てら(寺)推古紀)二二年春二月丙寅朔詔皇太子及大臣令興隆三寶是時諸臣連等各爲君臣之恩競造佛舍即是謂寺焉

てら(枕)六ノ寺でもりすべて例からぬ所よりつりふ人のかたりにてあるりひかくこそおぼゆれ

てら(後)法皇寺めぐり給ひける道よて(今鏡)序よれたよりよてらめぐりせんとて云々

てら(王)上「ふりよける森の梢よりつり來てありはがほかるてらつゝきりか

てら(字鏡)街天良波須(雄畧紀)「山のべれこトまこゆゑ人涅羅賦馬のやつけいをいけくもあ(万)十八「針袋帯つけかからさとことよてらさひあるけさ人

九見遊女大江以言其俗天下街賣女色之者老少提結邑里相望(文選)八四曹子建求自試表夫自街自媒者士女之醜行也

てら(照)万)二ノありねさは日にてらせれど(源繪合)十かくや姫の云々ひとつ家

の内にてら(同松風)十君さちの世をてら給ふべき光るければ

てら(千載)賀大宮前「君が代にあまのかくやまいづる日のてらんかぎりのつれどぞおもふ

てん(源桐つは)七おもいまは殿の東むさはいさて(同花宴)十あたらしいつくり給へる殿を宮たちの御もぎの日よりぎいつらわれたり

てん(空穂藏開)中九大將文のてん直とてある筆を春宮とらせ給ひて(源常夏)廿

あなりしこやくとてんがちよて(同帚木)十手を書さるよもふりき事あくてこ

てん(源)廿只此姫君のてんつりれ給ふまどくとよろづにおぼ

の給ふ(同わら)上三人よてんつりるべきふるまひのせととおもふものを(同若菜)下九猶あくかぎり人よてんつりるまどくて世をのどろよをぎ給もんにうらめ

たるるまどき心せつれまほしきわざかりける

てん(源松風)十天ようまる人あやしきとつ道よかへるらん一時よおもひ

てん(源手習)七いみどき天人のあまくなれるとみたらんやうよおもふ

(枕)八ノいと天人あそとをえいふまどけれど(同)九、をはいとへんげの物天人をど
のおりきたるよやと

てんをふりん轉法輪(拾玉)六一なむづやふるさむりしもあしがきのまぢりさも

のを轉法輪所

てんべん天變(源薄雲)廿四てんべんをきりよさとし世中をづりならぬこのれかり

(榮)わら枝二世中までんべんをどきりよて

てんどう纏頭杜詩、笑時花近眼舞羅錦纏頭(古事談)六御堂召兼時纏頭云々(白文)

卅二楊柳枝纏頭無前物一首斷腸詩(同)十二、琵琶五陵年少爭纏頭(江談抄)一夢解預纏

頭備(康平記)平定家各被獻若君御衣皆召御前使者有纏頭(白織物褂)各一領(著聞)十、敦延

方人纏頭せざりければ(同)廿くしをまろざりせさらば纏頭すべし

でんり殿下(平家)廿六其時の御せつろくの松殿までをまゝける云々殿下の御

出ともいもぎ一切下馬の禮儀よもおよませ

てんり天下(空穗藏開)上十六天下いりよいふとも此うへにあるべきよあらせ(同)

下、四天下あやよしきをいれてかざるともすまぢのすまど(同)同五又天下いまいか

よもはとらんどたまふとも例のあど人かれはとさよおもせんとておその(同)

嗟(院)十天下よおもふ人もたりともわがまを見奉らん人のおろりよあらとと

(同藏開)中ノ天下の後の位も何りのせん(同初秋)上ノそのいまみやをやいとらせ

給ぬ天下よいふともえまさることあらと(落窪)三、いどうつくしけなる男君をい

ざれてくの御覽せよ心なんいどうつくし侍る天下よ北方もえよくと給へととな

んおもひ給へるとの給へ(蜻蛉日記)上ノ天下よよくき人ありとも思ひを

不らとあせしめりておもへばいとこゝろやす(同)下ノ天下のきくさを取集てめづ

らりあるく玉せんをいひてそゝくりわたるほど(落窪)三天下のおよ心の人

もえよくみ奉らと(源寄生)廿天下よあまねき御こゝろなりともおのづからけおさ

るゝこともありかんり(同常夏)廿おとゞの君天下よおぢはともこの御りたゝ

のをけかうもてお給せんよの殿のうちにはたてりかんやとの給ふ(蜻蛉日記)中、

日くるゝやどよふみみえさり天下の空でとからんとおもへば答只今こゝちあゝく

て云(同)中、天下のさるがうことをいひのゝらるめれと夢にものもいもれせ(源

寄生)九、十天下よいみつき事とおぢりりどあづまよてかゝるさ死ものゝりの

えあさせ出給をざりきり(同玉かつら)十天下にめつおれ足をれ給へりともなよ

がいのつりうまつりやめてん備(空穗樓)上ノ上、これをかりの天下よの給ふとも

ふあくのえあらト(狹)^三をどこぎみ丁のうちよりいと一のびて出るをむ、いろお
ひつきて袖をひらへてたそ名のりせよさらせバ天下はいたしやらでからきめ見せ
んと忘かりかゝるれしきいと布しければ

てんりいち 天下一(空穂 藏開)四下仲頼の天下一の三の宮智とり給へどとられせ白

がねこがねあやしきをも物ともおもへらせ

でんぐく 田樂(百鍊抄)五 永長元年七月十二日殿上侍従有田樂事凡近日上下所々莫

不翫田樂(續世繼)^七十六 永長元年八月 云々そのと一 大田樂とて都よも道もさりあへ

せ神の社々此ことひまなかりける御事あるべくあどよし申けるこの御事を白河院

かけりせ給ふこともおろり也これよよりて御ぐしおろさせ給へり(榮 御着裳)^十で

んぐくといひてあやしきやうなるつゞみこしよひつけて笛ふれさゝらといふも

のつきさまトの舞してあやしの男ども哥うたひてこゝちよけよをこりて十人を

りりあり(朝野群載)^三其装束盡善盡美如彫如琢以錦繡爲衣以金銀爲飾富者傾産業

貧者跣而及之郁芳門院殊借叡感姑射之中此觀盛

てんたう 天道(榮 見とてぬ夢)四ノ二位えもいそぬ法どもをわれもし又人しても行

いせてさりとともと心のとりし覺せ何事も人やをる只天道こそ行いせ給へどとの

め聞ゆ(宇治拾)^二庭にあらをもしきて天道よろゝへ申給ひける補(同)三うれい

きとざりか天たうの我し物をたぶかりけり

てんそう 天奏(平家物語)一ノ常いてんそうをる折も有かど聞えしりどもこれら

身のやをふるまひてこそありしり

てんのおきて 天の掟(うつは 俊蔭)上 女の天道ままりせ奉る天のおれてあらば國母

女御ともおれ掟かくは山賤民の子ともなれ

てんのめ 天の眼(源薄雲)廿 天の眼おそろしくおもふさまへらるゝことを 補(宇治

拾)一 火をてんのめれどとくよともして

てんぐ 天狗(空穂 俊蔭)五十 かくをるりある山はたれりものゝ音をらべてあそびる

たらん天狗のをるよこそあらめ(平家物)^五いりさまにもこれにてんぐの所爲とい

ふさたよて補(榮 根合)廿 志ら川どのよの云々 天ぐあどむつりしきとたりよていと

トろとづらとせ給ふ(同 ぬのひき)廿 故よようるんもおそしましゝ天ぐありあど

いひしところと御さうたてさせ給ふ(同 廿 天ぐえつくらせ給ひトとねとがりいふ

ときしりどくくてくやうも過ぬめり(とりかへそや)^三廿八 てんぐの男をば女とあ

し女をばをどこのやうよかし御心よさえせかけりせつるなりそのてんぐもあうつ

きて云々

てんぐことま(源夢の浮橋)六事の心おしそりり思ひ給ふるよてんぐことまなどやうのものゝあさむきゐて奉りそりけるよやどかん承り

てんけ(蜻蛉日記)中世中よりあるとがまさりそりけんてんけの人々流さるとのしる事出来てまぎれよけり

てんこつ(天骨)六(宇治拾)一とくまへといへばさ死の翁よりの天骨もかくおろく雪の袖をひるがへはうまれながらよして天骨をえそり(著聞)十三中門の廊のか

べよりもらけのこきよて不動の立給へるをかきそりなるを云々おろるべき天骨といこれ(天骨)を申候ぞ此事制し給ふことあるまどく候

てん(天子)一(空穂 初秋)上ノ。御門詞云々天子をら言せむといふこといあ死よかりけりどこそいおもふらめ

てんとやう(天上)うつは(俊蔭)上親の天上し給ひて後

ぞんとやう(殿上)源(源 帚木)六(舟)とらひある殿上のそとよ御らんとおれさるもあり(同 紅葉賀)三日さけて各殿上よ参り給へり(千載)中侍従定家あやまちあるさまよ聞

めはことありて殿上のぞりれて侍りける云々(枕)六殿上よやりたれば人々とりてとていとどうとらひけるよ(同)八殿上より梅の花の皆ちりたる枝をこれいりよといひたるよたゞ清早く落しけりといらへされ(源)と、き、三おめやりあるよひの雨よ殿上にもをさく人きくおよ云々(同)廿一殿上ヲラハ大將殿の君ぞち殿上し給ひて参り給へり

でんとやうおりて(詞花)下四(位)一て殿上おりて侍りけるを云々藤原公○抄、藏人ハナレシカ

でんおやうびと(殿上人)源(源 わらわ)上ノつぎくの殿上人のそのこまわらうため

てんおやう(天井)うつは(樓の上)下ノろうのてん上よいかゞとがたくものうたをおりたるこまよし泥をそをたり云々からあやのうちりらるるをてんおやうよもそり

てうろう(嘲 瞬)枕(枕)十二愛敬なくと詞をかめきかそいへばいさるゝ人も聞人もわら

ふかくおやゆればよやあまりてうろうをるなどいさるゝまである人もわら泥かるべ

てうと^い 朝拜(源紅葉賀)九男君の朝拜よまゐり給ふとてさ^いのぞき給へり

てうと^ど 調度(源帚木)十うるむしきてうどのかざりとをるさどまれるやうあるものを(同東屋)五そこそりとあきものどもの人のてうと、いふりぎりのさどとりあつ

めてからべをゑつ、(漢王莽傳)禮儀調度(和名)二調度之部(延喜式)一神祇式充忌

部八人木工一人令造供神調度

てうをつ 超越(平家物)卅、そと^いのてうをつして右よかされることを申をりもあかり

りしり

てうぐく 調樂(源帚木)十をんどの祭のてうぐくよ夜ふけていみとらみぞれふる夜

(同わのな)下、まづ内くよてうがくのやうよ明くれあそびからし給ひれべ

てうたぬこ、ち(源常夏)二、(雙六)カケテ、むりう思ひまこえさせし御顔つねよえ見奉

らぬむりりこそ手うさぬ心ちし侍れと聞え給ふ

てうづ 手水(源若紫)四十御てうづ御りゆなごこあたよまゐる日たりうねおれたま

ひて(同すま)四十夜ふりく御てうづまゐりて(同、幻)四御てうづめとておこかひ給

ふ(允恭紀)二親執洗手水(枕)十二、おくのりたよ御てうづかゆおどしてを、の

りせば(落くほ)一三君の御てうづまゐれとてめさるれば

てうふく (うつ)初秋下ノ八仲忠の朝臣のうけ給りうるまゝありて水のそとり

草のそとりありきておろくの螢をとらへて朝服の袖よつゝとてもてまゐりて

てうし (枕)九ノ人の家につきくしき物、ひさけてうし

てうし 調子(源紅葉賀)十いとさどくて調子どもをさむひとわさりよからひとりた

まふ

てうと 調伏(枕)七、こもき物のけてうとさるけんトや

てうと 調(枕)一五、(翁丸)よぶよも今ぞたちうごく猶顔かどそれさめり物(藥)てうと

させをやといへば(源常夏)初ちりき川のいしおしやうのものおまへよててうとて

まゐらば(枕)九、よくてうとさる火桶の灰きよたよおこしたる火よ(拾)夏右大

將定國四十の賀よ内より屏風てうとて給ひれるよ(貫之集)十、(云々)櫛の箱鏡かどてう

とてやり給ふよそふとて(後)離みちのくよへまゐりける人よ扇てうとて哥書よか

かせ侍りける(源帚木)三万の御よそひかよくれとめづらしきさまよてうと出給ひ

つゝ(同夕るは)五、おのびててうせさせ給へりけるさうぞくの袴をとりよせ給ひて

(後)一、(雜)屏風てうとてかの國の名ある所々ゑよか、せて(拾)雜賀さりててうとて哥

をゑよか、せける(續後撰)賀延喜御時(云々)装束てうとてつらむとて(源藤)

末葉)廿おろきおとゞおろせと給ててうとて御ものよまるる

てうと(枕)十三 あかいとト犬を藏人二人して打給ひぬべし云々てうと給ふとい

ふ(同)十二 この翁丸犬也 打てうとて犬島まつりかせ(落窪)四 これがさうにいみと

てうとふせてのちよのよろこびまどふをりりへりとをやとあんおもひりり

てうせらる(礼)空穂國讓下云々 めいいてうせられつるよこうとて(同 櫻の上)

下六かゝる御使をめしこめてかうてうせさせ給ふいとふびんよと申せば(源葵)十

さいがよいととてうせられ(竹取)上 くらもちのこ血のなぐるゝとてうせさ

せ給ふ

ての(出居)源東や)廿 まろうとの御でゐさふらひとあつらひさわけ

てのかぎり(高光集)一 「さもあらばあれ人のまくらんこともしぎ手のかぎりある

物おもふみい〇河社ニ云手のかぎりとい指の限也指のおろければおろくものおも

ふ身をいふかり

てのうら(枕)三 よくき物、火桶すびつかさし手のうらうちりへしをとおのべを

とてあおりをるもの(貫之集)一朝日さけりたの山風いまごよもてのうらさむ

とこほりとりかん

てのさひ(榮わらえ)十 御靈會の糸を男のてのさひしてあほりくいたるこちする

てのものども(榮うらく)九 此手のあやしのものどもいりまどれて云々このけび

るいぞもの手のありぎぬをどきたるものさもさよりよよりて

ておりのきぬ(手織)蜻蛉日記)三 下づりへの人ておりのきぬのきせせひとど色よ

とぢがさね

てぐりのいと(手線)好忠集)四月(万代)夏 夏引のてぐり糸もまどいれよよるの

とトかくかりよけるりか

てぐるま(源 桐つは)七 てぐるまの宣旨などのたまをせても(うつろ 嵯峨院)一ノて

ぐるまの宣旨を申したさむあおおもふ

てま(貫之集)一 ほとゝぎはなくある聲を早苗とるてまうちお死てあそれとぞ死く

(夫)七後徳 大寺 「かまろのみあくち祭りいぐいそを田子のてまのかくとも

(堀百)早 苗 「くれぬともけふうゑとてよ早苗とる田子れてまえんあともかさよ

てまどひ(宇治拾)七 いとかかけバ水のませよとてきえ入やうにまれば供の人々手

まどひをしてちりく水やあるとそいふさわぎもとむれども水なり(同)四弟子ども
 手まどひをしていふまゝ誦經一つ(榮花山)十いみじきわさよおぞしてよろづ
 てまどひのこはことかくいのらせ給ふ(大鏡)入院のおそいまはなりけりと
 て車ども歩人もてまどひ立さわぎて(うつほ 俊かけ)上たびくの有りたる學
 生のをのこどもさえあるとのもてまどひをして(宇治拾)十三馬ぞひ手まど
 ひをしてあふりをとりにきせされ(同)十宮づらさも手まどひしてまことよ
 べきりたかけき(同)廿九手まどひしてさとうつりぬ(同)七手まどひして從者
 どもくからおろし

てまさぐり(瀆松)十五むすめの君の帳のかさびらすこいまはあけてうちを手ま
 さぐりにして見出てふしたり(枕)九扇を手まさぐりよして畫のたがかきたるぞか
 どの給ひて(宇治拾)七是を手まさぐりよつゆくほど(枕)十八せりいまさ
 ぐり手まさぐり(後)一元長のみこのをそとべりける時手まさぐりよ何いれて
 そべりける箱よりありけん(云々 空穂 田鶴の村鳥)十宮手とのへぬ琴を手まさぐ
 りよかきならしを人きけりとして(枕)五緒などをてまさぐりよして(輔親集)
 人々あまゝめて物ぞといひて手まさぐりよおもものをまろりして鳥のりひ子のりた

をしてかくいふ「りひよしてあまゝいあれば知がたしこやいひと死のこよある
 らん(宇治拾)三この石と手まさぐりよささるたれば

てけ(天氣)土佐日記上よふけて西東もみえぞしててれのことかちどりの心ま
 せつ(夫)

てけり(躬恒集)「秋霧のそるまよく見とたせば山のよきのおりそてけり
 てふ(竹取)かくや姫てふおほぬそ人のやつ(古)戀二「うさねは戀しき人を見

てしよりのめてふものこのをそめてき〇此の歌詞よて文よのをさしよえぞ
 りるを近頃の文よももらてふといふ詞を用いふかるの中つ世の例よさへり

文よのといふといふ(玉緒線分)四十丁(後拾)戀四「あみごをあふみれ海
 とかりよれみるめあしてふかめせ(同)兼盛「思ふてふことはいそでも

おもひけりつら死も今のつらとおもそ(貫之集)「年たてば花てふべくもあら
 かくよ春今さら雪のふるらん(拾)戀四よみ「我やう死人やつら死とちそやふる

神てふ神よとひえて(枕)十四たれてふ物ぐるひりわき人よさおもそれんとは
 おもそん(元輔集)「風をやみよ野の山はさくら花ちらぬ春のそぎぬてふらん

(万代)戀四信實「あふてふよさとの原と行人の妹があたりのことかさらなん(金葉)

戀下よみ「あふとてふ名の高一ま聞ゆれといづらひこよくりもどの里伊勢八しらす

集二「うめ花ちるてふかへ春雨のふりでつゝあく鶯のこゑ千載後上皇「いり

よして過よゝあたをそぐけんくらゐわぶてふきのふけふあ〇此てふいりゞ枕冊子此歌くらゐわづらふとあるよろわぶてふ誤あるべし

てふり著聞あまさかるひかのてぶりのからひよつけてよ云々補万五「あま

さかるひかよいつとせすまひつゝみやこのてぶりをえより

てふり手振「うつり祭の使」三四位五位あませて六十人をかりあり御馬ともひきさ

て手ふりどもたちなとり〇供人の手うちふるをあげていふかるべい

てふのゆめ蝶ノ夢堀百夢肥後「花ぞのゝこてふとあると見夢のこゝまぞろり

現とやせん詞花雜下百とせの花やどりてすぐて此世いてふの夢よぞあ

りける

て夫七好忠集「とつぎいとてくらが布をさらせると見えい花のさりり也

けり

てとと和泉式部集「おのがみなおもひくに神山のこのてがいさりてとよぞ

とる古素性春上「とてのとや人よからんさくら花手とよをりていへづとよせん

補風雅春中爲氏「さくら花いざや手とよ手折もてともちとせの春よかざん

てと九へ宇治拾十二廿六よく引て射りければ手とたへて池へ落入ものあり

てとらさ拾雜秋よみ「かのみゆる澤邊よたてるそが菊のなげとさえとれ色のて

あらさ夫十五顯朝「尋ねつゝいさとの山れもみぢをのいぐれよあへる色のてとらさ

て父也狭三中宮の御前の御男ぞされば姫君の御てよこそあかれ宇治拾五

其てと聞ゆる人うせにける後更科日記てあり人宇治拾五家ぬのい

うやうやこのてのそのあとよりおのれい生らたるものぞりかいへば

空穂國讓中廿三てよもめるされたるやうよた人もあいき人もいりで此人よも

のをいひわたらひよがあとおもれ給ひつるを補紫日記上宮の御てよてま

ろとろからぎ榮月の宴卅五びやうぶのゑのをとこを見ていてとてぞこひきこえ

給ひけるうつ後蔭四十八母ての手よもまさりて大鏡七てよ云々とき

こえさせたまひける空穂樓の上三御ていたれとり人のきこゆる宇治拾一わ

がての作りたるむぎの花ちりて實のいらざらん

補おて祖父榮衣の珠廿おててがおそりりれるをあらでいまでこざり

て、と、(大和物)六 近くをたよえをささめて、と、のかあしくする人ありけむ

て、(うつろ 樓の上)廿七 宮君の殿をばて、さとしてむつれ奉り給ひ(同 藏開)中ノ

て、さ、(うつくしう)給ふや 云々 大將かどて、(元)の宮をばおもひ奉り給ぞ

て、(ぎみ)父君(空穂 菊の宴)下ノて、君のわれをおもほし、時に(云々)まさこ君め

のとよいふほどよわれこそて、君のこひしくおせ給ふるよ

て、(狭)一、上ほのりかり御てあさりよ似るものかきよやとを捨山にのこぞ

おせさる、(同)二、ささかりをりけかり御ありさまかみの手あたりかとも今

も思ひ出られて(源)の、(り火)三 女の御さまとるりひあり御さるのてあさりかとい

とひや、(り)あてをりあるこ、ちして

て、(あらひ)玉葉)五 後夜の行ひよとべらんとて手あらひよまりりたるは物よ入る

水のいとそくなくあるよ 云々

て、(さぐり)源 空蟬)初 手さぐりのそくちひさは髪のとなが、(らざり)けそ

ひのさまよかよひさるも(同 末摘)廿 手さぐりのたど、(さ)あや、(う)こ、(ろ)え

ぬこともあるよや

て、(きざ)適座(盛衰)卅三、 あら猫殿の少食にておむけりさるよても適座よるよ

今すこ、(り)き給へり、と申は

補て、(テ)ニ(貫之集)「夏衣たちて一日より郭公とくきむとぞ待わさりつる(玉

葉)秋上 崇徳院 「さ、人をもとあらして、故郷よひとりつゆけきをみなへり(万代)

難六 「をぐして一年をいくらかぞふむむゆびもいとなく老よける(古)春下

人、(花)のさよのつねからば過して、むり、(又)もかへりきをま

て、(弟子)枕)廿、(こ)ゑひきつころひて佛の御弟子よさふらへば、(と)けのおろ、(と)べ

と申すを(源 蜻蛉)十 めのとこの大さこそれがをちのあざりそのので、(の)むつま、(き

など(大和物)一 哥云とよみたりけむ彼室よとまりさりける弟子とも哀がりけり

補て、(ほ)出潮(續後拾)冬、嘉陽門「あり明の月れで、(の)湊舟いまりいるらん千鳥

なくあり(新後)春上 順徳院 「なよとが、(の)出汐此夕なを、(の)春の、(の)ぎりぞぞ

いる(同)冬 俊成 「明石が、(の)月ので、(の)やみちぬらん須磨の波ちよ千鳥とわたる(續

古)秋上 後鳥羽院 「里のあまれたくもの煙こ、(ろ)せよ月のので、(は)此空をれよけり(新後)

海上人「このころのあまれとまやよふ、(の)馴て月の出、(は)のそとをるるか

て、(び)きのいと(古)戀四、よみ「夏引のてびきの糸をくりりへ、(と)けくともたえ

てもろ(仲正集)「かくさくりせーむもーらで誰よとててもろよ花をくさる風をも
てもかけで(金葉)夏能 「さまたれい小田のみかくち手もかけで水のこゝろよま
りせてぞみる

てもやまぢ(六帖)上六「わが袖ようつらばうつれてもやまぢつみやいれまーかぞー
この花(空穂 藤原君)一五十「手もやまぢ我くる糸を彦星のよる此衣よかるや棚機

てもすまよ(万)八ノ一「とけがためわが手もすまよさるの野よぬけるつをぞめー
てこえませ(同)八五十三「手も須麻爾るゑーさぎよやあへりていこれどもありぞこゝ
ろつくさん〇八雲よ手もまの手もやすめぞ也鈴屋翁説すまよの志まよの意々信

友シヒテ考ルニすまよトハ何トニマレ手ナハタラカシテトカクモノスル趣ナイフ
言歟サラバソレヨリヤ、轉リテアラソフヤウノ事ナスマヒスマフナドイフ活詞ト
ナレルニモヤアラム 補 北邊隨筆三
=考アリ

てささむ(伊勢集)三 前さいなどのをりーかりけるを花をかん手ささびよむをびた
りける(信明集)卅四「手ささびよ火桶此お死やわりてんこひーき人にあそぬ比哉

補(新續古)戀三、花山院 前内大臣 「契ーを待つる宵の手ささびよかきかひ琴の音を更よける
増補雅言集覽卷之四十二終

